言葉の真実と美について

日本語学者 宮地 裕



―人生五十年でも百年でも、言葉の真実と美というものは、人間存在そのもののように、なかなか掴み切れないものかも、と―

「風景」という言葉があります。「空海の風景」「心象風景」などと使われます。もっと普通には「風景写真」「入学式風景」などと言います。「風景」の基本的な意味は、外界の「けしき」でしょうし、派生的な意味は、内界の心象でしょう。

ここでちょっと触れておきたいことは、言葉の「意味」にかかわる「外界」と「内界」のことです。「風景」について言えば、本当に「外界のけしき」という「風景」があるだろうかということです。外界というものがあり、人が見ている限りでの外界の物があることは否定できません。しかし、外界あるいは外界の物そのものを「風景」というでしょうか。そんなことはありません。「風景」という言葉は、実は、人間の内界に取り込まれた外界、その限りでの外界を意味しています。すこし一般化していうことを許していただくとすれば、言葉は、一見、外界のものごとを写すものではありますが、実は、内界に取り込まれた言葉となってはじめて、生命をもつものではないでしょうか。

「合掌　私の全生涯の仕事は此経をあなたの御手許に届けそして其のなかにある佛意に触れてあなたが無上道に入られん事を御願ひするの外ありません　昭和八年九月二十一日　臨終の日に於て　宮澤賢治」

賢治の逝去二時間前の遺言でした。賢治の『國訳妙法蓮華経』の巻末にあります。弟清六はつづけて記しています。

「以上は兄の全生涯中最大の希望であり又私共に依托せられた最重要の任務でもありますので今刊行に当りて謹んで兄の意志によりて尊下に呈上致します　宮澤清六」

赤茶色の表紙のこの和綴じの本を清六さんから贈られたのは、昭和二十二年（一九四七）の暑い夏、花巻の宮澤家でのことでした。同行したのは後年の弁護士後藤昌次郎、黒沢尻（現在の北上市）出身の親友でした。同行したというより、連れて行ってもらったというほうが正確でしょう。二人ともまだ学生でした。五十余年後の今日、改めてこの跋文を読むと、賢治の追い求めて止まなかったものは、言葉の真実の美というものではなかったかと感じます。そして、残されたその名作のかずかずには、匂い立つ言葉の美があります。この人間賢治のあまりの凄さと純粋さゆえに、生前認められるところが少なかったのでしょう。そして、その凄さと純粋さによって、彼の言葉は永遠のものとなったのでしょう。

さて、初等中等教育の根本は、国語を中核とする言語の教育と、音楽・絵画・映像などの芸術の教育だと私は信じています。国語教育の分野から問題を考えれば、言語と文学の教育に重点を置くことを私はためらいません。声高に言うつもりはありませんが、国語の教科書にもその趣旨がにじみ出てよいと思っています。光村の国語教科書は、これが以前からの伝統となっています。たまたまのご縁ですが、私にとっては、ありがたいご縁だったという気がします。言葉の真実と美は、しかし、なかなか掴み切れないものです。それだけ魅力的な対象です。私も多年追い求めて飽きることがありません。子どもたちにも、深浅広狭さまざまでいいのですから、言葉の真実と美を感じ取ってほしいものと念じています。冷願熱望というところです。

宮地 裕（みやじ ゆたか）

1924年生まれ。日本語学者。国立国語研究所室長、大阪大学教授、帝塚山学院院長を経て、大阪大学名誉教授。光村図書の国語教科書編集委員。主な著書に『文論』『新版　文論』『慣用句の意味と用法』『敬語・慣用句表現論 』（いずれも明治書院）などがある。